# 東阿保村の安養寺

西田 孝司（松原市文化財保護審議会）

▲安養寺「御本尊様御箱」（右）と「鳳鳴」の署名（中）、木箱に書かれた安政の南海地震の記述（左）

▲安養寺本堂内陣　本尊の阿弥陀如来像を中心に向かって右は親鸞聖人絵像。本尊の左側は蓮如上人像、その左は聖徳太子像。

▲安養寺（阿保6丁目）　山門は平成6年の改築だが、そのもとは明治24年（1891）4月、三宅村の大工の岡本長三郎、岡本吉平が建てたもの。

## 慈願寺・東本願寺が関わった真宗大谷派、三五〇年の歩み

市役所の所在する阿保の地は、江戸時代前半までは丹北郡阿保村でしたが、のち東阿保村と西阿保村に分かれていきました。明治八年（一八七五）に、東西両村が合併して、再び阿保村が形成されたのです。正保二年（一六四五）の郷帳に書かれた村の石高に東西阿保村が分けられていますので、このころまでに分かれていたのでしょう。

このうち、東阿保村の今の阿保六丁目に真宗大谷派の安養寺が建っています。寺の過去帳に、初代住職と思われる釋宗念が寛文十二年（一六七二）十月二十五日に亡くなったとありますので、寛文年間までに創建されたと伝えています。

安養寺は、江戸時代後半までは本山の東本願寺の直末ではなく、八尾に建てられた浄土真宗の由緒寺院である慈願寺の下にありました。慈願寺は東本願寺に属しながら、河内を中心に摂津や大和などに三十か寺の末寺を持っていました（明治四年）。松原でも、安養寺の他、新堂の良念寺、河合の称念寺、上田の福應寺、小川の不退寺もその末寺でした（「歴史ウォーク」94・97）。

慈願寺に残る文書に、天和二年（一六八二）九月二十日に、安養寺に対して「木佛寺号御免状」「慈願寺下河州丹北郡阿保村惣道場安養寺」とあり、本尊の阿弥陀如来像と安養寺の寺号が与えられました。翌天和三年（一六八三）四月七日には「祖師御免状」とあり、開祖親鸞聖人絵像が下されています。さらに、翌貞享元年（一六八四）霜月（十一月）二十七日にも、東本願寺十四世の琢如上人絵像が下付されました。正徳三年（一七一三）になると、聖徳太子像やインド・中国などの七高祖像もそれぞれ与えられています。

今、寺に祀られるこれらの絵像には、年号は見られないものの、裏書があり、そのうち琢如上人絵像には「河州阿保村惣道場安粮寺」とあります。聖徳太子や七高祖像にも、それぞれ「河劦丹北郡阿保村惣道場安養寺」とあります。琢如絵像は、安養寺の「養」を「粮」と異なった表記をしていますが、ここで興味をそそられるのは、「阿保村」とあることです。先述のように、正保二年までには東西阿保村に分かれていたようですが、その後、八十年後の正徳三年の時点でも阿保村のままです。

阿保村は初め幕府領であり、宝永二年（一七〇五）以降は関東の秋元氏の領地となりましたので、東・西の区分けは、それほど厳密ではなかったかもしれません。

安養寺には、文政六年（一八二三）十一月二十一日、東本願寺二十世の達如が尼講に下した「御文」が蔵されています。そこには、「慈願寺下河州丹北郡東阿保村安養寺 尼講中」とあり、江戸時代後半には東阿保村は定着しています。

さて、幕末の嘉永七年（安政元年、一八五四）六月十四日、大地震が起こり、松原地方も大きく揺れたようです。いわゆる安政の南海地震で和歌山・大阪などは甚大な被害を受け、多くの犠牲者が出ました。この時、安養寺では本尊の阿弥陀如来立像を守るため、台座や光背から本体をはずし、木箱に入れ安全な場所に保管しました。「御本尊様御箱」と書かれ、時の看坊（住職）であった鳳鳴が大地震の様子を簡潔ながら、記しています。

鳳鳴の二十年ほど前の天保七年（一八三六）、安養寺には大芸という二十歳の僧もいました。大芸は城連寺村（天美北）の最勝寺の恵学の紹介で、同年七月二十六日、日田（大分県）の私塾・咸宜園が堺に開いた広瀬旭荘塾に入門しています（「歴史ウォーク」204）。

なお、現在の本堂は昭和六十三年に改築されていますが、棟札によると、そのもとは文政三年（一八二〇）四月上旬に、松原村新堂の大工棟梁、伊藤嘉兵衛豊久らによって建てられたものです。江戸時代後半以降、新堂には伊藤氏や村田氏らの大工棟梁が数多くおり、安政二年（一八五五）に再建された、同じ真宗大谷派で西阿保村の西徳寺も、新堂の伊藤利助によって建てられています（「歴史ウォーク」156）。